



お人好し職人のぶらり異世界旅 2

α L P H α L I G H T

電電世界

DENDENSEKAI



アルファイト文庫



キャリー

オコウで
凌腕のAランク冒険者。
ほつらん
女子力が抜群に高い
おじさん。

ココ

Bランク冒険者の犬獣人の女性。
たふらん
卓越した剣の腕前を持つ。

マアロ

食いしん坊なエルフの女の子。
回復魔法が得意な神官。

みっちゃん

腕時計型端末のAIだったが、
人工人体を手に入れた。

石川 良一

電気工事店を営んでいた青年。
分身をはじめ、様々なチート
能力を駆使して今日も人助け。

メア

モアの姉で、
異世界に来た良一の
妹になった女の子。
真面目な性格。

モア

良一の妹になった女の子。
いつも元気いっぱい。

一章 貴族になりませんか

石川良一——二十三歳独身。

日本で父親から引き継いだ電気工事を営んでいた彼は、不思議なサイトを閲覧したことをきっかけに、スターリアと呼ばれる異世界に転移した。

現在の肩書は……一応、冒険者である。

彼は異世界転移の定番であるドラゴンの討伐をすでに成し遂げていた。

この功績を評価され、彼には近々名誉貴族の爵位が授与される予定だ。

メラサル島に突如現れた黒いドラゴンは、良一達が生活の拠点にしていたイーアス村を含む島の各所に大きな被害をもたらし、村人達は今も森の奥の遺跡群で避難生活を送っている。

しかし、良一達の活躍によって元凶のドラゴンが討伐され、事態が収束したため、みんな村へと帰る準備を進めているところだ。

「良一兄さん、騎士の人が迎えに来ました」

青い髪の少女の声に応え、良一が立ち上がる。

「ありがとうメア、すぐ行くよ」

メアは良一が異世界に來てから家族になった少女の一人だ。両親を亡くして生活に困っていたところを助けた縁で、妹のモア共々彼が引き取り、一緒に生活している。

「石川良一様、お迎えに上がらせていただきました」

「ユリウスさん、公都までよろしくお願いします」

騎士ユリウスは、良一と一緒にドラゴンを討伐した騎士団の一員で、ドラゴン討伐隊の団長であるグスタール將軍の腹心の部下でもある。

良一達はこれからユリウスらに護衛されながら、メラサル島における最大の都市である公都グレイヴァールへと向かうことになっていた。

「事前の打ち合わせどおり、同行されるのは、妹君のメア様とモア様、ドラゴン討伐の功勞者、ココ様、それに……エルフの神官のマアロ様の四名ですね？」

「はい、そうです」

「メア様以外の方は外に出かけられているのですか？」

「良一兄さん、モアは友達に挨拶に行くって言って、ココさん達と出かけちゃいました。

私、探してきましたね」

メアは慌てて妹を探しに飛び出していく。

「ちょっと待って、俺も一緒に行くよ。すみません、ユリウスさん。すぐに呼んでます」

「いえいえ、急ぎの旅ではありませんので、ゆっくり挨拶を済ませてください」

良一はユリウスに一言断りを入れて、メアと一緒にモア達を探しに出かけることにした。

「モアちゃん、また遊ぼうね」

「うん、いっぱい遊ぼうね」

遺跡群の奥からモアの元気な声が聞こえる。

良一達が足を向けると、そこには同い年くらいの女の子達と楽しそうに話すモアと、付近の木陰からその様子を見守る女性が二人いた。

腰に片刃の刀を下げ、黒く長い髪から犬耳が覗く美女がココ。金髪に碧眼で小柄なエルフがマアロである。

「良一兄ちゃん！」

友達と笑いあっていたモアが、歩いてきた良一とメアに気づいて駆け寄る。

「友達とは挨拶できたのか？」

「ちゃんとみんなに挨拶してきたよ」

明るい笑顔で話してくるモアの青い髪を軽く撫で、良一はココとマアロに迎えが来たと

伝えた。

「騎士の方がもうお見えなんですね」

「良一、ドーナツ」

話の流れを無視して自分の欲望を口にするマアロに、良一は苦笑を禁じ得なかった。

ちょうど良一達が合流したところに、イーアス村の村長が歩いてきた。

「石川君、どうやらもう公都に向かうらしいな。明日、ここに避難している村民全員で、イーアス村に戻ろうと思っている。村は半壊してしまったが、君のおかげで村民に犠牲を出さずに済んだ。改めて礼を言うよ」

「いえ、当然のことをしましたまでです。皆さんにもよろしくお伝えください」

一通り顔見知り挨拶を済ませてユリウスのもとへ帰ろうとすると、モアが良一の袖を引っ張った。

「良一兄ちゃん、みっちゃん、の所に行ってバイバイしなきゃ」

「それもそうだな、みんなで行くか」

数分歩いて、良一が建て直した倉庫の一室に行くと、ディスプレイが自動で起動し、モアが命名した人格保持型AI「みっちゃん」が挨拶をしてきた。

この遺跡は魔導甲機と呼ばれるロボットのテスト施設だった場所で、こうした魔素

を動力源とした機械装置——魔導機、あるいは魔道具と呼ばれる物が残されている。

「おはようございます。ご用件をお伺いします」

「みっちゃん、バイバイしきたの」

「そうですか、寂しくなります。是非またお越しください」

コンピュータながらに見事な社交辞令を口にしたみっちゃんが、さらに続ける。

「皆様の手首に装着されているデバイスにOSを登録できますが、いかがなさいますか？」

言葉の意味が理解できずにポカンとしている一同に代わり、良一が尋ねる。

「それは、どんなOSなの？ たとえば、みっちゃんとか？」

「はい。何種類ありますが、私もインストールすることが可能です」

「そうか、なら全員のデバイスにみっちゃんをインストールしてくれ」

「かしこまりました。インストールを開始します。終了予定時間は二分後です」

あつという間にインストールが終わり、良一達が身につけている腕時計型デバイスにディスプレイと同じみっちゃんの顔が映し出され、みんなが驚きの声を上げた。

良一のデバイスからも、みっちゃんが音声で説明をはじめた。

「デバイスとの同期が完了しました。マスターデータはこの建造物の魔導機器ですので、通信は衛星を介して行います。ただ、今の通信状況は衛星に接続できないため、スタンドアローン状態です」

「このデバイスのことを何も知らないんだけど、何ができるの」

良一はこの遺跡で発見した腕時計型デバイスについて、改めて説明を求めた。

「本デバイス、携帯型マルチサポートデバイスは、通話機能、GPS機能、カメラ機能等、様々な機能を備えています」

「まるで携帯電話だな。衛星と接続が切れた状態だと、通話機能って使用できないのかな？」

「いえ、魔素がある場所ならば、デバイス間の距離が五キロメートル以内に限って直接通話可能です」

「じゃあ、試しにココのデバイスに通話したいんだけど」

「かしこまりました。通話を開始します」

すると、ココのデバイスから甲高い呼び出し音が流れた。

初めて聞く不思議な音色に、みんなが慌てふためいているのを見て苦笑しながら、良一はココにデバイスをタッチするように促す。

すると、良一のデバイスの画面にココの驚き顔が映し出された。

良一は試しに倉庫から出て通話してみたが、ノイズもなくハッキリとした会話ができた。

「その他の機能も、通信が必要な機能には制限がかかりますが、OSをインストールしたことにより、スタンドアローンで使用可能になりました」

「そうか。不明点があったら聞くから、またその時に詳しい説明をしてくれ」

良一は機器の電源を落とし、互いに通話をしてはしゃいでいる四人を呼びに戻った。

「おーい、ユリウスさんを待たせているんだ。遊ぶなら後にしようか」

「はーい」

手首のデバイスをあれこれ触り続ける四人を急かし、良一はユリウスが待つ仮設住居に戻ったのだった。



「それじゃあギオ師匠、またしばらく旅に出ます」

「ドラゴン騒ぎが収まって、今度は公都とは……やれやれ、忙しいな、良一。まあ、若くて力もあるんだ、心配はないか。思う存分経験を積みな」

「ギオ師匠には、木こりのことをまだまだ教わっている最中だったのに、すみません」

「基本はもう教えてある。後は数をこなして修業だな」

良一は公都に行った後、しばらくイーアス村には戻らず、他の町を見て歩くことにしており、ギオ達もそれは知っていた。

「いつでも遊びに来い。妹達も含めて歓迎するからよ」

イーアス村で定宿^{じようしゆく}にしていた。森の泉亭^{いずみてい}の店主や看板娘^{かんばん}のマリーも、良一の見送りに来ていた。

「また必ず泊まりに来てね！ 部屋を空^あけて待ってるから」

「みんな、ありがとう。それでは、行ってきます」

湿^{しめ}っぽい別れの挨拶ではなく、気さくな言葉を背に受け、良一達を乗せた馬車は動きはじめた。

馬車は一路、イーアス村とドワーフの里との間にあるドラゴン討伐軍の宿营地^{しゆくえいち}を目指す。そこで討伐軍と合流し、公都へと向かう予定だ。

公都に到着した後はホーレンス公爵主催^{こうしやくしゆさい}の名誉騎士爵位の授与式、さらに祝勝式典^{しゅくしょうしき}が待っているらしい。

そんな説明を受けながら移動を続けることしばらく。日が暮れる頃に今日の野営地に到着した。

「討伐軍のキャンプまではまだかかります。今日はここで野営をしなければならいのですが、荷物の関係上、石川様達には三人用のテントを二つしかご用意できませんでした。

どなたが使われるかは、そちらでお決めください」

ユリウスは部下と協力して見事な手際^{てきぎ}でテントを二つ建てた。

「ココ姉ちゃんと一緒に寝る」

「私も、ココ姉さんと一緒にいいです」

「分かった。二人とも一緒に寝よ」

ココは授爵式^{じゅくしき}の後に故郷に戻る予定だと聞き、このところメアとモアは彼女にベッタリだ。

「じゃあ、俺はマアロと一緒にのテントか」

「え、何するつもり？」

わざとらしく自身の体を抱^だきしめながら体をくねらせるマアロを見て、良一がため息をこぼす。

「はいはい、マアロの魅力^{みりょく}にメロメロだよ」

「心がこもってない」

いい加減^{かげん}な返事をしてさっさとテントに向かう良一の背中を、マアロが不満げにボスンと殴^{なぐ}った。

「マアロは神官様^{しんくわん}だろ、神様に身も心も捧^{たて}げているんじゃないのか？」

「私が信仰しているのは水の属性神ウンディーレ様。ウンディーレ様は女神^{めがみ}だから……」

「だから、なんだよ」

「教えない」

からかいすぎたせいかな、マアロは頬を膨らませて良一よりも先に立つて歩く。しかし、不意に立ち止まると、彼女は一層不機嫌な顔で振り向いた。

「ここは後ろから抱きしめて、謝るところ」

「なんでそうなる……」

少女マンガのような展開を期待するマアロを軽く流して、良一は靴を脱ぎ、自分達に割り当てられたテントに入り込んだ。

「軍人さんが使うテントだからか、三人用といっても、結構大きいな」

「本当に大きい」

寝転ぶ良一のすぐ隣に、マアロも転がり込んできた。

「少し近いぞ。これだけ大きいテントなら、お前はメア達のテントに行ってもいいんじゃないか？」

「三人で楽しく過ごさせたい」

「そうは言ってもなあ」

「私も楽しい」

マアロは寝転んだまま体を回転させて、良一に体を寄せる。外見的には幼いマアロに欲情する良一ではないが、美少女が側にいて嬉しくないわけではない。

「あー!? 良一ちゃんとマアロちゃんがくつついてる! モアもー!!」

突然、良一達のテントに現れたモアが、靴を脱ぎ捨てて良一の体に飛び込んで……馬乗りになった。

「良一兄さん。マアロさんと何をしているんですか。わ、わたしもします」

普段は窘める側のメアだが、珍しくマアロと反対側に寝てくつついてきた。

良一の両隣にマアロとメア、良一の腹の上にモアと、突如発生したおしくらまんじゅう状態を見て、テントの入り口から中を窺うココが咬く。

「良一さん。私、三人を良一さんのもに残して離れるのが不安になってきました」

「いやいや、心配するようなことは何もないから」

少女達にもみくちやにされながら言っても、まるで説得力はなかった。

野営地での一泊は賑やかに終わり、翌日の昼前にはグスタール將軍率いるドラゴン討伐軍のキャンプ地にたどり着いた。

挨拶をするために五人で指揮所に向かうと、書類を読んでいたグスタール將軍が立ち上がって出迎えた。

「久しぶりだね、石川君。遠路ようこそ。君達の公都までの安全は、我々が保障しよう」

「グスタール將軍、公都までの旅に同行させていただき、ありがとうございます」

「いやいや、ドラゴン討伐の功労者を公都に送り届けるのも、我が討伐軍の任務の一つ

だよ」

グスタール將軍は良一の隣に緊張の面持ちで立つメアとモアに目を向けた。

「こんにちは、お嬢さん」

「こ、こんにちは、石川メアです」

「石川モアです！」

メアはつつかえながら、モアは片手を上げて元氣よく、將軍に挨拶をした。

「カレスライア王国騎士団遠方將軍のグスタールだ。石川君の妹さん達は実に可愛らしいな」

「ありがとうございます。自慢の妹です」

「そうか。私にも王都に孫がいてね。將軍として王国中を回っているとなかなか顔を見ることができないんだが、お嬢さん達に負けず劣らず可愛いんだ、うちの娘も」

傷のある厳つい顔を緩めて、軍人ではなく祖父としての一面を見せるグスタール將軍は、同席している部下に促されて、話を進める。

「……ところで、石川君。聞くところによると、君はとても美味しい、異国の——誰も味わったことがない料理を作るそうじゃないか」

「そんな大袈裟な。故郷の庶民が食べる簡単な料理しか作りませんよ」

「いやいや、是非とも何か料理を作ってはもらえないか？ 勿論、相応の謝礼金は出す。

食材も、ここにあるものならいくらでも使ってもらって構わない。どうか、作ってはもらえないか？」

言葉の上ではお願いだが、強面の將軍に頼まれて断るのは難しい。おまけに、周りでは美味しい飯と聞いて騎士達が目を輝かせているのだから、拒否権はないに等しい。

「では、僭越ながら、何か作らせていただきます」

「そうか、引き受けてくれるか。では、この男が討伐軍の食事の責任者だ。食材の準備や調理場については、全て彼に聞いてくれ」

グスタール將軍はそう言い残すと、書類仕事の残務処理のために指揮所から出ていった。「初めまして、討伐軍の食事を任されておりますワンドです。よろしくお願いいたします」

その場に残ったワンドが一礼し、互いに自己紹介をする。

「石川良一です。なんだかいきなりのことですけど、こちらこそお願いします」

「では、早速食材を保管してある場所に行きましょう」

メアやモアも手伝ったが、今回は普段と勝手が違うので、待っているように言った。

ワンドに案内されて着いた場所には、食材を満載した荷馬車が停まっていた。

「食材はこちらの馬車に積み込んであるものをなんでも使ってください」

「大量ですね」

「ええ、二百人以上の兵士を食べさせないといけませんから」

馬車の中をしてみると、穀物の袋や保存用のパン、肉類、ジャガイモやニンジンにタマネギにキャベツといった野菜が置いてあった。野菜は地球のものと比べると品質のばらつきが大きい、調理に問題はなさそうだ。一方、肉はモンスターを解体したものがほとんどだった。

「それで、今日はどんな料理を教えてくださいませんか？」

「そうですね……鶏肉はあるみたいだから……」

將軍だけに料理を作るなら凝った料理を考えると、先ほど周りにいた騎士達の顔を思い出す限り、彼らの分も作っておかないと、恨みを買ってしまう。

「じゃあ、唐揚げと野菜の素揚げにしようかなと」

「唐揚げ、ですか？」

「鶏肉を油で揚げる料理です」

「油で!? それはまた珍しい調理法ですね。まずは何をお手伝いしましょう」

「キャベツを千切りにしてもらえますか」

「かしこまりました」

とにかく量を作ろうと、ワンドの部下に手伝ってもらいながら鶏肉を一口大に切り分け、

塩、胡椒とおろしニンニクで下拵えをした後、唐揚げ粉をまぶして、油で揚げていく。

肉と野菜は提供されたものだが、調味料や油、小麦粉、片栗粉などは良一が提供した。

クッキングシートの上に次々と並んでいく揚げたての唐揚げを一つ手に取り、ワンドは試食と称して口に運ぶ。

「この唐揚げと呼ばれる料理は実に美味しいですね。何より、食感が良い」

熱そうに頬張りながら、惜しめない称賛を送るワンド。

「調理と成長の神ケレス様の加護を受けている私は、これまで様々な料理を作り、食してきましたが、単純に見えてこれほどまでに奥深い味わいの料理を知ることができて、幸せです。この唐揚げならば、グスタール將軍も喜ばれるでしょう」

大量の唐揚げを揚げ終わったところで、ジャガイモやタマネギをスライスしたものを素揚げして、キャベツと一緒に付け合わせに添えて、料理は完成した。

グスタール將軍をはじめとする高官達が食事をとる天幕に、良一達五人も招待されていた。

「これが石川君の故郷の唐揚げという料理か。ワンドが太鼓判を押すだけあって、確かに良い匂いだ。では早速」

將軍は挨拶もそこそこに揚げたての唐揚げを一口で食べる。

「これは美味しい。王城で出される格式高い料理よりも好きな味だ。つつい酒が進む」

唐揚げはグスタール將軍にも好評なようだ。

良一の父親は生前、脂っこい料理は胃がもたれると言ってあまり食べなかったのだが、ここに集まった者達はやはり軍人だからか、父親と同じかそれ以上の歳に見えるのに、次々と唐揚げを平らげていく。

「良一兄ちゃん、唐揚げ美味しいね」

「熱いですけど、とても美味しいです」

笑顔で頬張るモアとメアを見て、やはり唐揚げは子供の好物だな、と良一は頬を綻ばせた。

ココとマアロも將軍の前とあつてがつつきはしていないものの、上品な所作で——それでも將軍達よりも速いペースで——唐揚げを口に運んでいる。

「軍務に当たっていると楽しみが少なくてな。食事にはこだわっているのだが、これはワンドの料理に匹敵する美味さ。まさしく絶品だ」

大好評のうちに夕食は終わり、食後のお茶を嗜みながら、話題は明日からの予定に変わった。

「明日から公都グレヴァールに向かうわけだが……クロック騎士隊長、このキャンプ地からだ、公都までおよそ五日といったところか？」

「その通りです、將軍。ドワスの町から先は街道が整備されているため、飛ばせば四日で行けますが、ドラゴン討伐の報せは早馬を出してあるので、急ぐ必要はありません」

グスタール將軍に意見を求められたのは、公都グレヴァールのホーレンス公爵麾下の騎士隊長三人のうちの一人らしい。外見は三十代で、若いながらもその腕を買われているのが窺える。

「石川君達はこちらの馬車で公都まで送り届けるから、安心してもらいたい」

「ありがとうございます」

「良一さん、そろそろ……」

会話を続ける良一に、ココが小声で囁き、視線でモア達を示した。

腹が膨れた上にお偉方との会食で若干緊張していたのもあってか、メアとモアはすでに目がトロンとしていて、必死で眠気を堪えている様子だ。

「將軍、明日も早いので、そろそろ失礼させていただこうかと」

「おお、すまない。つい長いこと引き留めてしまった。それでは、また明朝としよう」

グスタール將軍もモア達の様子を察して、場はお開きになった。

テントを出てココ達と別れた良一の背中に、マアロが声をかける。

「良一、今夜も二人だけだね……げぶ」

「そうだな、唐揚げの食いすぎでお腹をポッコリさせながら言われても台無しだけだな」

艶のある声を出そうとしたマアロだったが、食べすぎで苦しそうな声になり、色々と残念としか言いようがなかった。

「ほら、胃薬やるから呑んでおけ」

「ありがとう、良一」

当然、そんなマアロと艶っぽい話があるわけもなく、夜は更けていくのだった。

ユリウスが御者を務める馬車に揺られ、良一達はすることもなく公都までの旅を送った。馬車の中には毛布やクッションを敷き詰めるなどして走行時の揺れを抑えてあるので、比較的快適だ。

魔法書を読んだりモアに絵本を読んであげたりして過ごしていると、あつという間に農業都市エラルまでたどり着いた。

エラルで一泊するというところで、良一達にはテントではなく、宿の部屋が割り当てられている。

夕食を食べ終えた良一が部屋でくつろいでいると、扉がノックされた。

「石川さん、お久しぶりです」

訪ねてきたのは、ドラゴン退治のもう一人の功労者でもある、元Aランク冒険者のマセキスだった。

「マセキスさん、お久しぶりです」

「お元氣そうで何よりです。ドラゴン討伐後は男爵様の軍の問題でゴタゴタしていて、しばらく手が離せませんでした」

「こちらこそ、お礼を言わなきゃと思っていました。ドラゴンを倒しきれずに危なかったところにマセキスさんが来てくれて、助かりました」

挨拶もそこそこに、マセキスは話をはじめた。

「ところで、石川さんは公都で授爵が行われた後はどうするのですか？」

「一緒に行動しているココが地元に戻るので、貿易港ケルクまで見送りに行こうと」

「なるほど。ガベルディアス殿は地元へ……。石川さん、男爵様の家臣になりませんか？授爵されればあなたは名誉騎士爵の身分。男爵様はその能力と加護を高く評価なさっています。是非とも雇いたいと打診するように言われています」

「男爵様の家臣ですか。ありがたい話ですけども……。ピンと来ませんね」

「そうですか……。いや、無理強いするつもりはありません」

マセキスはそう言うのと、眼鏡の奥で穏やかに目を細めた。

「石川さんのような方には権謀渦巻く貴族社会は合いませんしね。あなたほどの実力があれば、権力者に取り入るのは容易なのに、今まで噂にすらならなかった。私も男爵様と一緒に公都で行われるドラゴン討伐祝勝会に参加するので、また会いましょう」

マセキスはそう言って去っていった。

「貴族の生活なんて想像できないな……」

部屋に残った良一は、そんなことを考えているうちに、いつの間にか眠っていたのだ。



「良一兄ちゃん、あれがグレヴァール？」

いよいよ公都グレヴァールが間近に迫り、モアは馬車から身を乗り出して前方を窺う。

「そうみたいだな。想像していたよりも大きいし、立派な壁だ」

一行は予定通りに、公都グレヴァールにたどり着いた。

公都は町全体を堅固な石の壁で囲まれているが、壁よりも高い建物も多く、大きなヨーロッパ風の立派なお城が見えている。

「良一兄さん、着いたら色々見て回りたいです。ココ姉さんも、一緒に良いです」

「ええ、私も急いで地元に戻るわけではないから、少し観光してから港に行きましょう」

そんな会話に口を挟んだマアロは……

「美味しいもの食べたい」

全くブレていなかった。

門をくぐると、良一達を乗せた馬車は討伐隊と別れて、大通りに面した宿に横付けした。

盛り上がる良一達を御者台からユリウスが振り返る。

「授爵式は明後日行われます。グスタール將軍から礼装のご用意があれば店を紹介するように言われておりますが、皆様は礼装をお持ちですか？」

「いえ、持っていないので、是非紹介してもらいたいです」

「そうですか、では明朝お迎えに上がります。今晩はこちらの宿でお休みください。授爵式までの宿泊はこちらの宿を手配してあります。代金も王国騎士団が支払い済みですので、旅の疲れを癒やしてください」

「送迎ありがとうございます」

「はいばーい」

ユリウスが去り、改めて宿の建物を見上げると、貴族の屋敷ではないかというくらい立派な外観で、入るのがはばかられる。

「本当にここが宿なのか？」

「この宿は公都でも指折りの名宿ですよ。そこにタダで泊まれるなんて、良いんでしょうか？」

恐縮する良一とココを横目に、子供達——と、マアロはさっさと中に入っていく。

「良一兄さん、絨毯が凄くフカフカしていて、転んじやいそうです」

「わー、広くてキラキラしてるね、お姉ちゃん」

「お腹空いた」

豪華な宿に入ると、キッチンとした服装に身を包んだ青年が出迎えてくれた。

「ようこそ、石川様。当宿の受付をしております、イヌヤと申します」

「しばらくお世話になります」

「当宿は、貴族の方々にも利用していただいております。ご要望があれば、私どもになんなりとお申し付けください」

メイドの女性に案内されて通された部屋は、スイートルームといった趣きで、部屋の数も多く、寝室が二部屋に、大きなソファがある談話室まで備えられていた。

内装も豪華そのもので、窓にはバルコニーがあって公都の景色を一望でき、ところどころに飾られた絵画や生花が彩りを添えている。

「うわわわ、体が沈みます」

おそろおそろソファに座ったメアだったが、お尻がグググッと沈み込んでワタワタしている。

モアもそれに触発されたのか、ソファに体を埋めてはしゃぎはじめた。

豪華な客室の中でワイワイと楽しんでいると、扉がノックされた。

「失礼します。お食事の用意ができましたが、客室で召し上がりますか？ それとも、食堂になさいますか？」

「騒がしいと他のお客さんの迷惑になるんで、客室で食べます」

「左様ですか。では、準備に入らせていただきます」

運び込まれた料理はどれも盛り付けが美しく、味も素晴らしかったが、一皿あたりの量が少なく、良一達の胃袋を満たすにはお上品すぎた。

良一もメアとモアも、コース料理というものに馴れていないため、ナイフとフォークを上手く使えなかったが、ココとマアロに教わりながら食べていた。

「美味しいけど、良一兄ちゃんの料理の方が好き」

「同意する。これじゃ足りない」

比べるものではないとはいえ、モアとマアロに評価されて、良一も満更ではなかった。

「あ、明日は俺とココの礼服を買いに行くけど、その時にメアとモアの礼服も買ってあげるからな」

「良一、私は？」

「ついでにマアロもな」

翌朝、朝食を終えて少しすると、ユリウスが宿の前に迎えに来た。

「おはようございます。では、お店へご案内いたします。どうぞ馬車にお乗りください」
良一達は早速馬車に乗り込んで、礼服を取り扱う店へと向かった。

ユリウスは部下に御者を任せているので、彼が自ら良一達を店の中に案内した。
「どうぞこちらへ。こちらが、公府でも大手の服飾を取り扱う店です」

「いらつしやいませ、これはユリウス様」

「主人、昨日申し付けた授爵式に着る礼服を、こちらの二人に見繕ってください」

「かしこまりました。どうぞ奥へ」

良一は既製品きせいひんを買うのかと思ったが、大体の背幅せはばや肩幅が合うものを、本人のサイズに調整するそうだ。さすがに急ぎとあつてあまりデザインは選べないが、サイズは豊富に用意されていた。

良一とココが採寸さいすんされる横で、メアとモアとマアロが女性用ドレスを見てはしゃいでいる。

「採寸お疲れ様でした。本日の夕方には宿の方へお届けに参ります」

「ありがとうございます」

良一の採寸はすぐに終わったが、ココの方はまだ少しかかるらしい。

その待ち時間を利用して、良一はメア達のドレスを選ぶことにした。

「すみません。妹達のドレスもお願いしたいんですけど」

「妹様方は、これから大きくなれますので、大きめのドレスを選ばれた方が長くお使いいただけると思いますが、もし授爵式後の祝勝会に参加されるのでしたら、サイズを合わせたドレスの方がよろしいでしょう」

「そうですか。じゃあ、ピッタリなのでお願いします」

「あちらに小さめのサイズのドレスがございますので、どうぞ」

「おーい、メア、モア、マアロ、こっちに来てくれ」

良一に呼ばれた三人は、キャツキヤとはしゃぎながら色とりどりのドレスを手鏡の前に立つ。

良一はどれが似合うか何度も尋ねられ、その度に良いと思う方を答える羽目はめになった。

「良一兄ちゃん、これが一番可愛い」

「私はこのドレスがとても素敵すてきだと思います」

「これがいい」

三人がお気に入りのドレスを決め、一度試着することになった。

試着部屋から出てきた三人は、我先われさきにとドレス姿を良一に見せてくる。

「どうどう、良一兄ちゃん」

「似合いますか、良一兄さん」

「感想は？」

「ああ、三人とも似合っているよ。お姫様みたいだ」

良一が褒めると、モアはその場でぐるんと回ってスカートをなびかせ、メアは嬉しそうに両手を頬に当て喜び、マアロはドヤ顔で笑う。

そんな中、採寸が終わったココが顔を出し、ドレス姿のメア達を見て歓声を上げた。

「お待たせしました。あら、三人ともとても似合ってる！ 凄く可愛い」

五人で喋っていると、店の隅で待機していたユリウスが近づいてきた。

「石川様、仕立て直しが終わるまで時間があります。これからどうなさいますか？ 宿に戻るなら馬車を出します」

「ありがとうございます。でも、少し五人で公都を見て回ろうかと」

「そうですか、では、授爵式の二時間前に宿までお迎えに上がらせていただきます」
そう言って、ユリウスは馬車で走り去った。

「さて、どこに行こうか」

「あっち」

店から出た良一達は、マアロに先導されながらとりあえず街中を進んでいた。

メア達のドレスは礼服と一緒に宿に届けてもらうことになっている。

しばらく公都の街並みを見ながら歩いていると、大きな白い石でできた神殿があった。

「ここは、前に聞いた公都の神殿か。風の属性神が祀られているんだっけ？」

「そう、属性神の一柱、風の女神シルフィーナ様が祀られている」

マアロが胸の前で手を合わせて祈る仕草をしながら教えてくれた。

「どうする、お祈りをしていくか？」

「うん」

モアがするというので五人で神殿に入ると、農業都市エラルにあった治水の神モンド神殿よりも人が多かった。しかし祝福を受ける神官が三人いるため、あまり長く待たずに済みそうだ。

「マアロは祝福を受けないのか？」

「私はウンディーレ様の神官。他の神の祝福は受けない」

「そういうもんなのか」

「良一兄ちゃん、もうちょっとだよ」

神官見習いの少年に、祝福を受けないマアロを除いた四人分のお布施を払う。

順番に従って祝福を受けると、エラルの時と違って今度は良一だけが体が力が増えるを感じた。

「どうやら良一以外の三人には加護が付かなかったらしい。」

「今日はボカボカしなかった」

「私ものです。しませんでした」

「二人とも、がっかりしないで。普通は加護なんて滅多につかないのよ」
残念がる姉妹を、ココが優しくなだめる。

後がつかえているので、列を離れて出口に向かおうとすると……

「石川さん、お久しぶりです。風の属性神の加護を得たようですね」

振り返ると、そこにはなんと、セールスマンに扮して良一を異世界に導いた神白さんがいた。

もつとも、今はスーツ姿ではなく、他の神官らとよく似た服を纏っている。

「えっ、神白さん！ お久しぶりです」

意外な人物との再会に、良一の顔が綻ぶ。

「お元気そうで何よりです、石川さん」

「また会えるとは思っていませんでした」

「ここは石川さんが謁見した主神の従属神の神殿ですから、こうして再び会えたのです」

良一が神白と喋っている、マアロが強い力で良一の手を握ってアピールした。

「おう、どうしたマアロ？」

「あのお方は、三主神の一柱、ゼヴォス様の使徒であらせられるの？」

「ええ、そうですよ。そちらのハイエルフとエルフのハーフの娘は、神官ですか？」

神白が頷くと、マアロはその場で跪いて祈りをはじめた。

「水の属性神ウンディーレの神官マアロ・フルバティ・コーモラスと申します」

「主神ゼヴォスの第一使徒ミカエリアスです。清らかな水の加護を持っていますね。そのまま精進を重ね、務めを果たしてください」

「使徒様のお言葉、ありがたく頂戴いたします」

突然始まったやり取りに、良一はメアとモアと一緒にボカーンとしているが、ココは神白がミカエリアスと名乗ると、マアロと同じように跪いた。

「今日は神白として——石川さんの知人として顕現したのです。そんなに畏まらないでください」

神白はそう言うが、マアロとココは頑なに顔を上げないので、諦めて良一と会話を続けた。

「神白さんは、別の名前もお持ちなんですね」

「ええ、まあどちらも私の名前なので、お好きな方で呼んでください。今日は石川さんの気配を感じたので、顔を見に来たんです。お元気そうで安心しました。どうですか、こちらの世界は？」

「はい、可愛い二人の妹もできて、毎日が楽しいです」

「そうですか。メアさんにモアさん、あなた方も幸せですか？」

「うん、良一兄ちゃんと暮らせて、すっごく楽しい」

「私も良一兄さんの妹になれて、本当に幸せです」

二人の返事を聞いて神白は笑顔で頷いた。

「二人とも良い子ですね。良く学び、健やかに成長してください。では、こうして会えた記念というのも変ですが、私から皆さんに試練を与えましょう。もう一柱の神の加護を得てください。達成した暁には、アイテムボックスの能力を付与しましょう」

神白はそう言い残して、忽然と姿を消した。

「二人とも、もう神白さんは帰ったよ」

しばらく経って良一が声をかけると、ようやくマアロとココが立ち上がった。

「馴れ馴れしすぎる」

マアロは少し力を込めて良一の太ももにパンチする。

「良一さん、まさか第一使徒のミカエリ阿斯様とあんなに気軽に話す間柄だったなんて、ドラゴンと遭遇した以上の衝撃です」

ココはすっかり気疲れしたのか、声に覇氣がない。

「……そんなもんなのか？」

良一は実感が湧かなかったが、二人はもう疲れたと言って宿に帰りがくらくらいなので、相当な大事だったらしい。

「良一兄さん、さっき会った神白さんって、どんな人ですか？」

「そうだな、神白さんがいなかったら、俺はメアとモアに会うことはなかっただろうな」

「なら、今度会ったら、お礼を言いたいです」

「モアも！」

「そうだな、なら、神様の加護を得ないと」

そうして一行は、しばらく公都を見て回りながら、歩いて宿屋に戻った。



「さあ、今日は授爵式だ。きちんとしないと」

翌日、良一は朝から気合い充分だったが、いざ準備を始めると、宿屋の使用人が何から何まで手伝ってくれ、礼服を着せたり、整髪料や香水などもつけてくれたりして、身を任せるだけだった。

準備は三十分ほどで終わり、ココやメア達の支度が終わるのを待つだけだ。

宿屋のエントランスのソファで座って待っていると、昨日までとは違う白く綺麗な鎧を着たユリウスが来た。

「ガベルディアス様達の準備はまだのようですね？」

「メイドさん達がもうすぐ着付けが終わると言っていたので、それほどからないかと」
ユリウスと話していると、奥から数人が歩く足音が聞こえてきた。

「良一兄ちゃん、見て見て！」

「モア、走るとドレスが汚れちゃう」

可愛らしいパステルカラーのドレスを着て、薄い口紅や化粧でおめかししたメアとモアがやってきた。

「二人とも、とても可愛いじゃないか。本当にお姫様みたいだ」

良一が褒めると、二人とも嬉しそうにポーズを取って、ドレスの後ろ姿を見せた。

「良一、お待たせ」

続いてやってきたマアロは、黒いドレスで金髪が良く映える。子供らしい可愛さのメア達とは対照的にグッと大人っぽい雰囲気があった。

「マアロも似合っているじゃないか」

「ありがとう」

しかし、良一の視線は彼女の奥から現れたココの姿に釘付けになった。

「お待たせしました。このようなドレスは着慣れていないので……。似合いますか？」

黒髪を一つにまとめ、純白のドレスに身を包んだココはまるで天使のようで、冒険者稼業で引き締まった体のラインがところどころ強調されるデザインが、健康的な色香を漂



わせる。

「ココ姉ちゃん、綺麗だね」

「ありがとうモアちゃん」

「いや、本当に綺麗だよ」

良一はなるべく平静を保ってそう言ったものの、化粧も相まって普段の見慣れたココとの違いに戸惑い、変に意識しそうになって照れ笑いを浮かべる。

「ありがとうございます。良一さんもお似合いですよ」

全員の準備もできたので、良一達はユリウスの馬車で公爵の城へと向かった。

「授爵式といっても、難しい作法はありません。公爵様が前に歩いて来られたら頭を下げて、謹んでお受けいたします」と言うだけです」

「分かりました」

公爵城に近づくにしたがって良一とココの緊張が高まるのを察したユリウスが、授爵式での注意事項や立ち居振る舞いについて気軽な調子で話して、空気を和らげようとした。

「すぐに終わりますから、緊張するのも少しの間ですよ」

公爵の城に着くと、たくさんさんの馬車が入り口の前に停まっていた。

礼服やドレス、式典用の金属鎧を着た人達が次々と城に入っていく。

「では、妹様方はこちらでお願いいたします」

公爵の城に入るとココと良一は別行動となり、式典の間は、女性兵士がメア達三人を見てくれることになった。

「では石川さん、ガベルディアスさん、こちらにどうぞ」

授爵式は城内の大ホールで行われるらしく、すでに人がたくさん集まっていた。

「間もなく式が始まりますので、こちらでお待ちください」

周りにいるのは初めて見る顔ばかりとあって、良一達はユリウスに案内された場所でおとなしく待つ。

「ギレル男爵がいますね、それにグスタール將軍も」

ココの言う通り、ホールの奥の壇上にある公爵が座ると思しき椅子の近くに二人が立っていた。

しばらくして、公爵お抱えの楽隊による荘厳な演奏が鳴り響き、それを合図に式が始まった。

「これより、ドラゴン討伐の祝賀式を行います。式の初めに、公爵様が入場いたします」司会の者がそう言うと、ラッパの音とともに公爵が入場してきた。五十代ぐらいの男性で、立派な髭を生やした貫禄のある人物だ。

「ドラゴン討伐、大義であった」

公爵が会場を見回して劳いの言葉をかける。

グスタール將軍やギレル男爵をはじめ、周りの全員が頭を下げるのに倣^{なま}って、良一とココも頭を下げた。

「それでは、ドラゴンの亡骸^{なきがら}を皆の前に」

公爵の一声で、配下の者達がドラゴンの遺骸^{いがい}を運び込む。

血や汚れなどは綺麗に整えられたものの、その巨大さと獐^{じやう}猛な姿を初めて目の当たりにする参列者は、皆驚^あきを露^とわにする。ご婦人方の中には小さく悲鳴を上げた者もいた。

「驚かせて申し訳ない。しかし、このような恐ろしいドラゴンを討伐した討伐軍と、それを率いたグスタール將軍の榮譽を、改めて讃^{たた}えたい」

公爵がそう言うと、大きな拍手が湧き起こった。

「グスタール將軍。貴君には、単竜討滅勲章^{たんりゆうめつしやう}を授ける」

「謹んで頂戴いたします」

前に呼ばれたグスタール將軍に、公爵が勲章のメダルを授^{さづ}けた。

「次に、危険を顧^{かえり}みずドラゴンが現れた報せを伝え、ドラゴン討伐にも寄与^{きよ}した二人に、名誉騎士爵を授けたい」

公爵がそう言うと、良一とココは拍手で壇上に迎えられた。

「石川良一」

名前を呼ばれた良一は、公爵の前に進み出る。

立ち読みサンプル はここまで

「汝^{なんじ}を名誉騎士爵として王に代わり爵位を授与する」

「謹んでお受けいたします」

良一がそう言って頭を下げると、一際大きな拍手^{ひたきわ}が湧き起こる。

同じ流れで、隣にいるココも爵位を授かった。

「これにて、ドラゴン討伐の功労者への勲章および爵位授与式を終了する」

案外あつという間に爵位授与式は終わり、公爵、男爵、続いてグスタール將軍も退場していく。

良一達も退場すべきか迷^{まよ}っていたところ、文官の一人が声をかけてきた。

「石川様、ガベルディアス様、どうぞこちらにお越^こしください」

文官の後についていくと大ホールを出て、そのまま近くの談話室に通される。

中にはグスタール將軍、ギレル男爵、マセキス、ユリウスなど、見知った顔が何人もいた。

「授与式、ご苦労だった。これで君達もカレスライア王国の貴族になったわけだ。とはいえ、名誉騎士爵という肩書は、このメラサル島だけでしか通じない。王都のあるカレスティア大陸、モトラ侯爵^{こうしやう}が治めるフミレラ島、ケスロール伯爵^{はくしやう}が治めるキセロス島などでは、貴族と認められないから、そのつもりでいてくれ」

グスタール將軍は貴族制度に馴染^{なじ}みがないであろう良一達に向けて名誉騎士爵の説明を